

シノドスへの歩み みことばと共に 年間第七主日C年

小西広志

2022年2月22日

はじめに

東京教区の皆さん、こんにちは。教区シノドス担当者の小西広志神父です。今日は2022年2月20日、年間第七主日となっています。今日の主日の三つの朗読箇所をシノドス的な観点から読んで味わってまいりましょう。

殺してはならない

第一朗読で、ダビデはサウルのいのちにとどめを刺す好機を得ました。サウルはダビデのいのちを狙っていたのです。すでに『サムエル記上』24章では、ダビデはサウルを殺害することができました。しかし、「この方は主の油注がれた方なのだ」（サム上24章7節 フランシスコ会訳）と手を止めます。今日の朗読箇所でも「殺してはならない。主が油注がれた方に手をかければ、罰を受けずには済まない」（26章11節）と、とどめを刺しませんでした。ダビデは自分が神さまから油注がれた、つまり、祝別された存在であることをよく知っていたのでしょう。同じように油注がれた者であるサウルに手を下せなかったのです。

似姿

第二朗読は、最後の節にあることば「似姿」（49節）を心に留めてください。似せて造られた像のことを似姿といいます。肖像と書いて「にすがた」と読ませるときもあるようです。人間は神の似姿です。わたしたちは今は「最初の人アダム」のもとにあって「土からできたその人の似姿」になっていますが、復活の時、「天に属するその人の似姿」となるのです。

あなたがたの父が憐れみ深いように

福音朗読では、「あなたがたの父が憐れみ深いように、あなたがたも憐れみ深い者となりなさい」（ルカ6章36節）を味わいましょう。

隣人を愛して生きていきたいと誰もが願っています。しかし、自分と気の合う人とは仲よくできますが、何となく気の合わない人とはうまくやっていく自信がありません。しかし、この人も神さまの子どもで、神さまからおめぐみをたくさんいただいているのだと思えば、そう簡単には相手のことを無下にはできないでしょ

う。今日の第一朗読のダビデはそんな気持ちだったのだと思います。「主が油注がれた方に手をかければ……」はダビデの思いを表しています（サム上 26 章 9 節）。

うまくいかない相手とどのように付きあえばよいのでしょうか。イエスさまのことばにヒントがありました。「あなたがたの父が憐れみ深いように」。父なる神さまのあわれみ深さに気がつくこと、感じること、知ることがなによりも必要なのです。

まとめ

今年の 11 月 27 日よりミサの式次第が変わります。式文がずいぶんと変更になります。半世紀前のラテン語のミサから日本語のミサに変わったときに生じた混乱がまた生じるのかなと想像しています。すでに、変更箇所の一覧などが発表されていますから、皆さんもご覧になっているでしょう。

ところで、あわれみの賛歌がいつくしみの賛歌が変わります。「主よ、いつくしみを」の先唱に対して会衆は「主よ、いつくしみをわたしたちに」と応えるようになります。つまりあわれみからいつくしみへと変わるわけです。この点について、批判をなさっている方々もいらっしゃるようですが、その批判は、あまり意味がないようにわたしには思えるのです。あわれみがよいか、いつくしみがよいか語句の問題は、これはその人の感受性と関係しますから、議論してもしつこくせません。ましてや、だったらラテン語のミサの方がよいというのもおかしい話で、ラテン語がお分かりになるの？と問いかけたいです。

むしろ、わたしはこう考えたいです。つまり、今回の式文の改訂であわれみから、いつくしみという表現に変わったおかげでわたしたちはさらに神さまの愛の豊かに触れることができるのです。ミサの式文はただ唱えるのではなく、できれば一語一語かみしめて、味わって唱えたいものです。司祭も、ただ式文を読むのではなく、こころに響く式文の一節を大切にしながらミサをささげるのです。ミサの式文がすべて分かる人はいません。ミサに繰り返し与えることで、司祭であればミサを繰り返しささげることで、少しずつ式文のもつ深い意味に気づいていくのです。あるとき、先輩の神父さんと電車に乗っていて、その方が「主イエス・キリストのめぐみ、神の愛、聖霊の交わりが皆さんと共に」という言葉はすごいよねと突然話しかけてきました。わたしはビックリしましたが、何か神さまの恵みの働きでその神父さんは、ミサの式文のその箇所に驚かれたのだと思います。このような体験は司祭ばかりではなく、修道者も信徒もできるはずです。

これまで、あわれみと表現していた神さまの愛への願いを、いつくしみと言い換えることでさらに豊かに神さまの愛を感じる機会となるのだとわたしは確信しています。そして、「いつくしみをわたしたちに」と会衆の皆さんと共に唱えることで、神さまからの愛の恵みを願う神の民の一員にわたしがあらためてさせていただくことが実感できると思うのです。今回のミサの式文の変更にわたしはキリスト信者として積極的な意味といえましょうか、意義を見いだしていきたいです。

今日の福音で「あなたがたの父が憐れみ深いように」とイエスさまはおっしゃいました。何げない一節にも聞こえますが、大切なことが隠されているのに気づかされます。つまり、イエスさまにとって神さまは「父」でした。ですから、「わたしの父」です。しかし、ここでは「あなたがたの父」と神さまを呼んでいますから、イエスさまが「父」と呼んでいる方を、「わたしたちの父」と呼んでいいのです。イエスさまはご自分の父なる神を独り占めしないで、わたしたち渡してくださったのです。これはすごいことだなと思います。ここにイエスさまの憐れみ深さを感じます。ここに父なる神さまのいつくしみの深さを感じます。

いつもイエスさまとご一緒に「わたしたちの父よ」と呼びかけることができますように。

それではまた来週。